発掘調査の概要

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第173-8次調査）

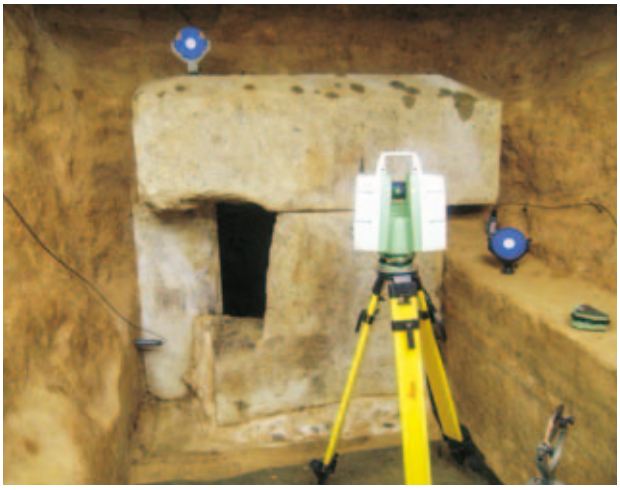
奈良文化財研究所では、2010年６月にキトラ古墳の石室内調査を実施し、石室の構造や石材の状態、朱線や棺台痕跡の残存状況等を精査し、記録作業をおこないました（飛鳥藤原第170次調査）。しかし、石室南壁の盗掘孔には石室に入るための進入装置が設置してあったため、装置に覆われた部分については、十分な検討ができませんでした。

そのため、今回は進入装置を取り外し、盗掘孔周囲を中心に調査を実施しました。期間は2013年２月18日から27日まで、調査は奈文研、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の３機関が共同でおこないました。

調査では、石材の形状や、表面に残る加工痕跡、石材相互の組み合い方等を精査し、実測、拓本、写真撮影、3Dレーザー測量等様々な方法で詳細な記録をとりました。これにより、2010年度の調査成果とあわせ、石室内全体の記録が揃いました。

また、今回は、2010年度調査の時より石室内の状態が良好であったため、新たに50カ所以上で石材に描かれた朱線の残存部分を確認できました。これまでの成果もあわせ、同一直線上にのるものを１本として算出すると、確認できた朱線は合計で24本分になります。これらの朱線は、石材を加工する際の基準として用いられたと考えられます。

今回の調査で、キトラ古墳の石室内についての調査は最後になります。今後は、石室閉鎖および古墳の整備へと移っていきますが、今回得られた新知見やデータを、今後の整備・活用に役立てていきたいと考えています。　（都城発掘調査部　若杉 智宏）



3Dレーザースキャナーによる測量

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次調査）

甘樫丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵です。『日本書紀』には、皇極天皇３年（644）に蘇我蝦夷・入鹿の邸宅が営まれたことが記されています。

奈良文化財研究所はこれまで、丘陵東麓の谷の一つで継続的な調査をおこなってきました。その結果、７世紀前半から８世紀初頭にかけて、大規模な造成をともなう活発な土地利用がおこなわれていたこと、谷の入り口付近と奥とで土地利用の様相が異なっていたこと等があきらかになっています。

今回の調査地は、継続調査をおこなってきた谷から北東に尾根を一つ越えた小さな谷、およびその西側の斜面と尾根の上です。調査区の面積は、あわせて1038㎡。調査は2012年12月に開始し、現在も継続中です。

尾根の上と斜面の調査区では、残念ながら古代の明瞭な遺構は確認できませんでした。谷部分では、調査区西部で緩斜面に広がる拳大～人頭大の石のまとまりが見つかりました。これらの石は古代のものとみられますが、詳細については、なお検討中です。また、調査区東南部では、谷の埋め立て土とみられる層が厚く堆積している様子を確認しました。かつては今よりも深い谷が、南東に向かって開いていたようです。

調査地は、近年まで果樹園として利用されていました。遙か古代には、果たしてどのように利用されていたのでしょうか。今後の展開にご期待ください。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

緩斜面に広がる石の集積（南西から）